

ニコラス・ラヴ 『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』：
水曜日 第十五章—第十八章¹⁾

田 口 まゆみ

Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*: part 4

Mayumi TAGUCHI

第十五章 我らが主イエスの断食と荒れ野の誘惑について

我らが主イエスは、直前の章で述べましたように洗礼を受けられた後、まっすぐ荒れ野に入られて、洗礼を受けられた場所から約4マイルのところにあるクアレタナと呼ばれる丘の上で²⁾四十日間昼も夜も断食され（マタイ、4：1-2. Cf. マルコ、1：12-13；ルカ、4：1-2）、福音書記者マルコが述べているように、野獣と一緒におられました（マルコ、1：13）。

さて、ここで我らが主イエスに、そして主の行いに、特別の心を傾けましょう。この出来事によって、主はわたしたちに多くの美德を例示し、教えを論しておられるからです。主はたったお一人で断食をされ、祈り、寝ずの業をし、地べたに横になり、眠り、謙卑に野獣と暮らされました。その話には、特に霊的な営みと高德の生活に属する四つの事柄が、驚くべ

平成16年7月30日 原稿受理
大阪産業大学 人間環境学部

- 1) 本稿は『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』（*The Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*）第一部「月曜日」（大阪産業大学論集人文科学編112号（95-118）、113号（201-217））、114号（ - ）に続く、「水曜日」の訳である。訳の底本としては、Michael G. Sargent, ed. *Nicholas Love's Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ: a Critical Edition based on Cambridge University Library Additional MSS 6578 and 6686* (New York, 1992) ; L.F.Powell, ed. *Mirroure of the Blessed Lyf of Jesu Christ* (Oxford, 1908) 及びラヴの原文あるいはそれに近いと考えられている、Cambridge University Library, MS Additional 6578を使用。ラヴの加筆部分の始まりを [N] , 終わりを [n] で示している。
- 2) 聖書には無い記述である。典拠は、『黙想』（*Meditationes Vitae Christi*）, A. C. Peltier, ed., *S. Bonaventurae Opera Omnia*, vol.12 (Paris, 1868), 538a.32.

くも、互いに作用しあう形で示されています³⁾。それは、独居、断食、祈り、肉的苦行の四つで、これらによって、わたしたちは、心の清浄という気高い徳に最も近づくことができるのです。心の清さはわたしたちにとって最も必要なもので、それ自体の中に、いわば他の全ての徳、つまり愛、従順、忍耐などを含んでいますから、何よりもまずこれを願わなければなりません。また心の清浄は悪徳を駆逐します⁴⁾。悪徳とともにあっては、また美德が欠けた状態では、心の清浄が持ちこたえることができないからです。ですから『教父問答集』という書物の中に⁵⁾、僧の全ての営みはまず第一に心の清さを獲得し維持することにあると書いてあるのです。心の清さによって人は神を見る資格を得るのですから、それも当然のことです。キリストご自身が、福音書の中で、「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る」(マタイ 5:8)と証言しておられますし、聖ベルナルドゥスは、「清らかであればあるほど人は神により近く、またよりはっきりと神を見る」と言っています⁶⁾。そのために、この気高い徳、つまり心の清さを獲得し、維持するには、第一に、懸命に敬虔に祈ることこそ効果がありますが、祈りについては、後で話しましょう⁷⁾。しかし、祈りも暴食欲や色欲、肉なるものの愛や怠惰の心で行うかぎりほとんど価値がありません⁸⁾。ですから、祈りと共に断食と肉的苦行が、しかも節度をもって行われなければなりません。節度に欠ける肉的苦行は、全ての善行を妨げるからです。

また、これら三つのこと全てを続け、全うするためには、第四のこと、つまり独居が大変役に立ちます。雑音や雑念が多いと、祈りを良く、敬虔に捧げることができないでしょう。多くのことが目に、耳に入ってくる人は、心の不浄、良心の過ちを免れることが大変難しく、往々にして、私たちの窓から死が魂の中に入ってきてしまいます(エレミヤ書 9:21)。ですから我らが主イエスと霊的に結ばれたいと願い、清らかな心で神を見たいと願うあなたは、

3) 傍注：nota bene processum de quatuor (4つの注意点)

4) 傍注：Puritas cordis (心の清浄)

5) *Collationes Patrum*(原文)：ヨハネス・カッシアヌス (c.360-c.430/35)。中世の靈性に大きな影響を与えた古代修道制の創始者の一人。独居における観想生活を修道制の目標に掲げ、観想と心の清さを結びつける教えは、グレゴリウスに大きな影響を与えて、そのまま中世の修道制に受け継がれた。トマス・アクィナスも毎日のようにカッシアヌスを読み、その思想から一度ならず靈感を受けたという。(J. ルクレール, F. ヴァンダンブルーク, 岩村清太他訳, 『中世の靈性』, キリスト教神秘思想史2 [平凡社, 1997], 11, 56-59, 73, 82, 92, 125, 134, 155, 282, 478, 487, 631, 706)。『鏡』の原典『黙想』, 538b.7. には、『問答集』(*Collationes*), 1.7 (PL 49, cols.489-90) が引用されている。

6) 傍注：Bernardus。『黙想』にベルナルドゥスの言葉として言及されているが、原典は不明。

7) 傍注：primum oracio (第一：祈り)

8) 傍注：secundum et tertium Jeunium et affliccio corporis (第2, 第3：断食と苦行)

イエスの例に倣い、孤独な場所に入り、[N] 自らの状態を（清く）保ちつつ [n]、この世の人との交わりから逃げなさい⁹⁾。好奇心から、新しい知己や交友を求めてはなりません。あなたの目を耳を、空しい幻影で満たしてはなりません。これまでに、聖なる教父たちが荒れ野や、その他人々との世俗の交わりから遠く離れた孤独な場所を求めたのは理由のないことではないのです。また彼らが、団地で修道生活をする者たちに、見るな、聞くな、話すな、そして精神の安息を妨げ、乱すものから、精神にとって有害なもののみなして逃げるようにと教え命じたのも故ないことではありません。

この孤独な暮らし、逃避は、聖ベルナルドゥスが言うように¹⁰⁾、肉においてより霊において、より徳高いのです。つまり、人は神への献身における誠意と霊において、世間と他の人から隔離されるべきで、そうすることで、霊的に、霊である神と結ばれるのです。そして肉肉的な孤独については、特に、特別な祈りを捧げる時のように—— [N] 隠棲者や修道生活者のようにそれぞれの立場に応じ独居が要求される者の場合は、その他の時にもそうですが [n] ——時と場合に応じてのみ要求されるのです。ですからベルナルドゥスは次のように言っています。「肉的に大勢の人の中にある者よ、あなたも、もし一般の人々が愛するこの世のものを欲せず、愛さないならば、また、もし、なべての人々がこぞって望み、手に入れるものを蔑み、捨て去るならば、また、争いや討論から逃げるならば、また自分自身が受けた害について悲しみを感ぜず、自分に対して行われた悪を気かけず、報復しようと思わないならば、霊的に孤独で、独りであることができます。逆にそうでないならば、たとえ肉的に独りで孤独であっても、魂の上で真に独りであるとは言えません¹¹⁾。そして一般的に、どのような仲間と交わっていようと、もし真に霊的に孤独でありたいと願うなら、二つのことに気をつけなさい。それは、他の人々の交わりに好奇心を抱き、あれこれ詮索しないこと、また他の人々を、でしゃばって憶測で裁こうとしないことです。」¹²⁾

これは聖ベルナルドゥスの独居に関する言葉ですが、ここから、霊的孤独が実現されなければ肉の孤独も完成されないということがわかります。とはいえ、霊的孤独を实践するためには、肉の孤独が大変有効です。精神が、内的に、（霊的）伴侶であるイエス・キリストとひとつに結ばれることを妨げる可能性がある、外的な事象を追いやることのできるからです。ですから、全身全霊で主に倣い従うことに専心することで、つまり、教えのとおり真の独

9) 傍注：Nota de solitudine（独居に関する注意）

10) 傍注：Bernardus super cantica sermone XI; “Sermo in Cantica Cantorum,” LX.4 (PL 183:983).

11) 傍注：Nota bene（注意）

12) “Sermo in Cantica Cantorum,” LX.5 (PL 183:984).

居、敬虔な祈り、断食、節度ある肉の苦行を行うことで、御恵みにより、主と結ばれうるのです。

さらに、主が荒れ野で野獣とお暮らしになったということから、質素に暮らすこと、どのような人の輪の中に暮らそうとも謙虚にふるまうことの範、またそうすることで、わたしたちにとって理性に欠け、ふるまいや暮らしが獣のようだと思われる人をも忍耐をもって耐え、許すための範を学ぶことができます。そして、そのように我らが主イエスが荒れ野で苦行の四十日を過ごされたことを心にとどめた上で、すべてのキリスト者の魂は、心からの同情によって、荒れ野の主のもとを度々——特に、主が洗礼を受けられた顕現日に始まり主が断食をしながら荒れ野に暮らされたと言われる四十日の後までの間に——訪れなくてはなりません。

ここで、さらに主の誘惑について語りましょう¹³⁾ (ルカ、4:2-4; マタイ、4:2-4)。四十日の断食を成し遂げられると、主は空腹を覚えられました。するとすぐに嘘つきの誘惑者、悪魔が、イエスが神の子かどうか知ろうと躍起になっておりましたので、主のもとに来て、食欲で主に対する誘惑を始め、このように言いました¹⁴⁾。

「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」(ルカ、4:4)

しかし悪魔は、真実の師である方をその悪だくみで騙すことはできませんでした。主は、悪魔に対し大変賢明に応答され、食欲の誘惑に負けることもなく、しかも、実は心で欲と戦っておられたことを敵に知られることもありませんでした。主はご自分が神の子であることを否定も肯定もなさらず、聖書の権威で論駁されたからです。ですからわたしたちも、ここで主イエスの例に倣い、食欲の悪に打ち勝ちましょう。なぜなら他の悪に打ち勝ちたいと願うなら、そこから始めなければならないからです¹⁵⁾。[N] 敵は、霊的生活に入る者を、たいていの場合、食欲の悪から攻め始めるからです [n]。ですから、おわかりのとおり、食欲の悪に負けた者は、その間、他の悪徳に打ち勝とう、抵抗しようとしても弱々しく力が及ばないのです。学者たちが福音書のこの箇所に触れて、まず暴食の悪を退けなければ、他の悪徳に対抗する苦労も空しいと述べているとおりです。

その後悪魔は、主を高く引き上げ、そこから約8マイルと言われているエルサレムに連れて行き、神殿の屋根のてっぺんに立たせ、やはり主が神の子であるかどうかを確かめようと、虚栄の喜びで誘惑しました¹⁶⁾ (ルカ、4:9-13; マタイ、4:8-11)。しかし、ここでも主は、

13) 傍注: De temptatione domini (主の誘惑について)

14) 傍注: prima temptation de Gula (第一の食欲の誘惑)

15) 傍注: De abstinentia et contra gulam nota plenius infra capitulo xxiiiij¹⁰ (禁欲について、及び食欲との戦いについては第24章の例を参照)

16) 傍注: Secunda. de vana gloria. (第2:虚栄について)

聖書の権威によって悪魔に勝ち、悪魔は、主を人として高慢の悪で傷つけることができず、自分自身は決して神に知恵で優ることがないと知り、完璧に敗北したのでした。ここにわたしたちは忍耐の手本を見ることができます。主と主が愛するものすべてを憎むその残忍な獣が、主を思いのままに試し、連れまわすのをじっとお耐えになった、我らが主の偉大な温和さと忍耐について考えて御覧なさい。

この後悪魔は、聖ベルナルドゥスが言うところでは¹⁷⁾、主に神の印を見ることができなかつたのでイエスは神ではないと考え、さらにイエスを人として誘惑しました¹⁸⁾。この三度目の誘惑では、主を高く引き上げ、再び前述のクアランタナの丘のそば、2マイルのところにある高い丘のうえに連れて行き、主を強欲の悪、[N] 加えて邪心崇拜の悪で [n] 誘惑しました。しかし¹⁹⁾ 悪魔はここでもはっきりと叱責され、完全に打ち負かされましたが、「N」これらの誘惑と福音書については、さまざまな博士たちがもっと明晰に解説していますので、ここでは他の解釈と同様簡単にすませ、この書物の初めに述べたとおり、基本的に黙想に立脚することにします。[n]

ここで、我らが主イエスが、敵にどのように扱われ誘惑されたかについて良く心を傾けるならば、わたしたち虫けらがしばしば誘惑に駆られることがあろうとも驚かずにすむでしょう²⁰⁾。なぜなら聖ベルナルドゥスが他の箇所でも何度か述べ²¹⁾、また使徒も語っているように（ヘブライ人への手紙、4：15）²²⁾、主はこの三回のみならず、罪のない人の弱さにつけこむあらゆる誘惑をお受けになったのですから。この後、敵が完全に敗北して去ってしまうと、天使が来て主に仕え、お世話をいたしました。

しかしここでは、よく心を傾けて、我らが主イエスがお独りで食事をされ、その周りには天使がお仕えている様子を心の中に描いて見ましょう²³⁾。そして敬虔に、想像力によって、その後に起こったことを考えてみましょう。それは大変美しい光景で、神への愛を掻き立てるものだからです。それではまず最初に、長い断食直後に天使が主にさし上げた食べ物はどうなものだったか考えてみましょう。この点については聖書は触れていません。ですからわたしたちが理性に基づいて想像し、この尊い宴を思いのままに仕切ってもよいのです。[N]

17) Bernard, "In Die Sancto Paschae Sermo," 11 (PL, 183:279-80)

18) 傍注：Tercia. de Auaricia. (第3：貪欲について)

19) 傍注：hic (注意)

20) 傍注：Nota de temptacionibus sufferendis (誘惑に耐えることについて)

21) Bernard, "In Psalmum XC, *Qui Habitat* Sermones XVII, in Quadragesima Habiti," XIV.4 (PL 183:240).

22) 傍注：Ad hebreos (ヘブライ人への手紙から)

23) 傍注：Meditacio deuota (黙想)

ただし間違っても断定するのではなく、心を込めて想像し、推測し、一般的な人の流儀に従って考えてよろしい。[n] もし主の力を [N] 神の力として [n] 考え、語るなら、疑問の余地はありません。当然ご自分の食べたいものをお作りになることができ、御心により作られる、また作られていたものを召し上がることができるのですから。しかし主がこの力、この能力をご自身や使徒たちの肉なるものの必要からお使いになったという例は見つけることができません。もっとも、主が神であることを人々にお示しになるために、二度²⁴⁾、奇跡によって、ほんの少しのパンと魚で大変大勢の人々の腹を満たされたという記述はあります(マタイ、14：13-21；マルコ、6：30-44；ルカ、9：10-17 及び ヨハネ、6：1-14)。[N] しかし、使徒たちについては、主がおられる時に、空腹から麦の穂をむしって食べたと書いてあります。このことについては、後に触れるでしょう。[n]

また主ご自身が、旅に疲れ井戸の上に座り、サマリアの女と話された時についても、主が食べ物を作られたという記述はなく、主は使徒を町に遣って食べ物を物乞いさせました(ヨハネ、4：6-8)。ですから断食の後も、肉が飢えていたとはいえ、人としてのお姿のみをお示しになったのですから、奇跡によってご自分の報いを用意されたとは考えにくいのです。まわりには、いつものように奇跡を働くことによって教えを説くべき人々はおらず、ただ使徒たちが待っていただけです。しかもその丘に人の住み家は無く、食事が用意されていたわけでもありませんから、預言者ダニエルの場合のように、天使たちがどこかよその場所から、料理された人の食べ物を運んできたと考えerべきでしょう。聖書によれば、ダニエルが獅子の洞窟に落とされた時、やはり預言者であるハバククが畑で刈入れをしている使用人たちのもとへ食べ物を届けるところを、主の使いがハバククの髪の毛をつかんで持ち上げ、ダニエルがその食事を食べることができるよう彼をバビロンのダニエルのもとへ運び、その後、直ちに元の場所に帰したとあります(ダニエル書 13：32-38 [ベル 33-39])。ですから、ここでもそのように想像してみましょう。いわば霊の歓喜で、この食卓の我が主をもてなしましょう。また特に、聖母さまについて心に刻み、このように心から思い描きましょう。

サタンを嘘つきの誘惑者と叱責し、完全に追い払ってしまうと、天使たちが大群で我が主イエスの勝利を祝うために御もとに来て、地面に跪き、敬虔に主を讃え、主人として、全能の神として挨拶しました。我が主は、温和に優しく使徒たちを起こし、あたかもご自身が真^{まこと}の人間であり、したがって天使よりも幾分劣り、階位が低いということをお示しになるかのように、天使たちに頭を下げて挨拶されました。天使たちは、言いました。

「我が尊い主よ、長い断食をなさいました。食事をされなくてはなりません。何をご用

24) マタイ、ルカとマルコの記述が一致していないため、伝統的に、イエスは最低2回パンと魚で奇跡を行ったと解釈されている。Sargeant, p.217, n. 75.6.

意させていただきますか。』

すると主は言われました。

「私の母の元へ行き、何でもいい、用意のできているものを持ってきなさい。肉なるものの食物で、母が作るものほど好ましい物はないから。」

そこで二人の天使が飛び立ち、あっという間に突然マリアさまの前に現れ、恭しく挨拶をすると彼女の息子からの伝言を伝え、彼女自身とヨセフのために用意していたつつましい食事から、パン一塊りと一枚の布を、その他の必要な物と一緒にイエスのもとへ運びました。多分、神のお望みになるように、その時聖母さまが料理して添えた小さな魚も少しあったでしょう。そうして戻ってくると、天使は布を地面に広げてその上にパンを置き、穏やかに立ち、我らが主イエスと共に祈りを唱え、主の祝福を待ち、食卓につかれるのを待ちました。

さて、ここでよく注意を払ってください²⁵⁾。特に独居をしているあなたは、あなたが食事を他の人と同席せず独りで食べる時に、主のこの食事を思ってください。我らが主イエスが、いかに謙卑に地べたに座って食事をされたことか。そこには敷物もクッションもありませんでした。長い断食の後の空腹にもかかわらず、いかに上品に、控えめに召上ったことか。天使たちが、主人に仕えるように給仕しました。多分一人がパンを、一人がワインを、また一人が魚料理を。そして何人かは天の甘美な歌を [N] 吟遊詩人の代わりに [n] 歌い、そうして彼らの主を [N] 天の人に似つかわしい [n] 思いやりをこめた歓喜で元気づけ、慰めました。[N]あなたが独りで、独居の個室で食事する時にも、もしあなたが慈愛を持ち、特に使徒の教えどおり、心を神に向けているなら、たとえ目に見えなくても、この天上の仲間と同席しているのです。使徒はこのように私たちに言っています。食べる時も飲む時もまたその他のことをする時も、すべてわれらが主の御名においてすること。そのイエスの名を常に祝福し、持てるものが多かろうと少なかろうと、良い時も悪い時も、心で主に感謝すること。そうして独りでいても、霊的にそこにいる尊い天使たちを肉なる目で見ているかのように食事をする。[n]こうして我らが主イエスに心の中で同調し、全能の神、至上の主、全世界の創造主、「全て肉なるものに糧を与える方」(詩編, 135:25) が、かくも従順に、肉なるものの食物が必要であるかのように、一人のこの世の人間として食事をされるお姿を心に描き、主を愛し、感謝し、心から喜んで苦行を引き受け、わたしたちのためにそのように多くを耐えてくださった主のために、病にも耐えなさい。

さらに我らが主イエスが食事をされ、祈られた、つまり父なる神に、人として、肉なるものの食事を感謝された後のことについて述べるなら、主は天使たちに残った食べ物を母のもの

25) 傍注：Vide solitarie et reclusa (独居者、隠棲者へ、黙想の指示)

とへ持ち帰り、じきに彼女のところに帰るからと伝えるようお命じになりました。天使たちが言われたとおりにして、またすぐに戻ってくると、そこにいた全ての天使たちに向かって、こう言われました。

「父のもとへ、あなた方の至福へと帰り、父と天の宮廷のすべてによろしく伝えてください。まだわたしには、ここ地上で、しばし宿り人の生活をする必要がありますから。」

そこで天使たちはすぐさま地面にひれ伏し、主の祝福を心から請いました。そして主の祝福を受けると天に舞い戻り、そこで、主の慈悲深い勝利の知らせを告げましたので、尊い天の宮廷はこぞって喜び、歓喜と神への感謝に満ち満ちました。[N] このようにして以上の話について考え、想像し、黙想という手段によってわたしたちの神への思いを高めることができます。この話には、この世で人が遭遇する誘惑について触れた、多くの良い注目点がありますが、このことに関しては、聖グレゴリウス²⁶⁾ およびその他の学者たち、特にクリソストムスが『未完成』で²⁷⁾、「イエスは荒れ野に導かれて云々」というこの福音書を解説しています。それらは良く書かれていますし、ラテン語だけでなく英語にもなっているので、ここではとばして [n]、我らが主イエスが、ナザレの母の待つ家にお帰りになる話に進みましょう²⁸⁾。その時主はあの丘を降りるとヨルダン川にやっこられました。洗礼者ヨハネが、主をみとめ、すぐに主の方へ近寄りつつ、主を指差し、主を示してこう言いました。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。この方こそ、わたしが洗礼を受けた時に霊が降ってとどまられた方だ。」(ヨハネ、1：29-32)

その後、また別の日に、アンデレとペトロとその他の弟子たちがイエスと言葉を交わり、イエスを知るようになった時、洗礼者ヨハネは最初にしたようにイエスを(メシアとして)示したと、ヨハネによる福音書に書いてあります(ヨハネ、3：20-30)。

さらにその後、我らが主イエスはその地を去り、ガリラヤへ向かわれ、ナザレの母の元へ来られました。前にも述べたとおり74マイルのその長い道のりのご苦勞に思いを馳せながら、主の後に続かなければなりません。そして家に着かれた時、主の姿をみとめた母がどれほど喜ばれたかは筆舌につくせません。母はすぐに立ち上がり、イエスを抱き、口付けをして息子の帰還を喜び、無事に息子を返してくださった天の父に感謝しました。しかしまた、イエスの顔がこけて青白いのに気づき、大変心を痛めました。主は腰を折って、マリアさまに母として丁寧にあやめ、またヨセフを父と崇めて、以前のように従順に彼らと共に暮らされま

26) Gregory, "Homilia Evangelia, XVI" (PL 76:1134-38).

27) Pseudo-Chrysostom, *Opus Imperfectum in Matthaum*, "Homilia quinta ex capite quarto," (PG 56:661-71).

28) 傍注：De redditu domini a temptationibus (主が誘惑に打ち勝ち帰宅される)

した。しかし、以前とは違って外に向かって完璧なお姿をいや増しに示していかれました。そのことには後で触れましょう²⁹⁾。

しかし、イエスの尊い御一生のすべてを、これまでどおり、前述のボナヴェンチュラがラテン語でしたための書物のおり黙想によってすっかり英語で書きつくすならば、読む人にとっても聞く人にとっても冗長で、多分退屈なので、特にこの書物の対照である純朴な人々にとっても教えになるものが少ないと思われる多くの章と長い話については、主の受難に近くまで割愛し、省略した箇所については、イエスの恵みによって、もっと簡単な形で、最も必要で最もためになる事柄についてのみ語ることにします。また、最も実りあると思われる事柄のみ、そのことに関する章のみ、神のお導きによって記すことにします。

このボナヴェントゥラは、これらの黙想の甘い果実を感じたいと思うあなたに、いつも注意を怠ることなく³⁰⁾、どの箇所を読んでも、主が弟子たちと一緒におられる時も、他の罪人たちとおられる時も、真剣に心の中で我らが主イエスの一挙手一投足をつぶさに想像しなさいと言っています³¹⁾。そして主が人々に教えを説いておられる時、人々にどのように語られたか、また奇跡を働かれた時、あるいはその他全ての行いにおいて、そのなさり方に注目し、特に、できることなら主の尊い顔を拝みなさい。それは何より難しいことに思われますが、その恵みを受けることができるならこれ以上の喜びはないだろうと思います。ですから、特別な黙想の指示が無い場合には、この一般的な方法で十分でしょう。アーメン。³²⁾

第十六章 我らが主イエスが伝導を始め、弟子を集められる

前に述べましたように、洗礼を受け、誘惑を受けられた後、我らが主イエスはナザレのご自宅に帰られて、少しずつご自分をお示しになり、内輪で、また集まった人々に伝道を開始されました。少しずつというのも、その後の一年、つまり洗礼を受けられた時からちょうど12ヵ月後に、婚礼の席で初めての奇跡を働かれる時まで、伝道を本格的に開始されたことについてははっきりと十分には書いていないからです。主や主の弟子はその間も伝道をしておりましたが、洗礼者ヨハネが捕えられて投獄される以前には、その後ほど充実して、定期的にはなされなかったのです。このことで、主はわたしたちに驚くべき従順の模範を示されま

29) 傍注：Nota bene pro ordine Capitulorum et modo scribendi in sequentibus. (章順と後述箇所での記述様式に注意せよ)

30) 傍注：nota bene (注意)

31) 傍注：vide in capitulo proximo sequenti quod hic omittitur (ここで省略されたことについては、次章を見よ。)

32) 注記：De Aperitione libri in sinagoga; nota in capitulo sequenti. (会堂で聖書を開かれたことについては、次の章を参照)

した。伝道において、主は、ご自分よりはるかに劣り、比べ物にならぬほど価値低いヨハネに道を譲られたのです。ですから主が、多くの人がするように自慢に膨れて教えを始めたのではなく、従順に、少しずつ、穏やかに始められたことがわかるのです。

さて、安息日に、いつものように、他の人々同様ユダヤの人々の教会の会堂に入られると、司祭か学者のように聖書を朗読しようとしてお立ちになりました。預言者イザヤの書が主に渡され、主は書いてある箇所へ書をお開きになると、次のように朗読されました。

「主の霊が私の上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、云々。」(イザヤ、61：1-2)

そして書を閉じ、係りの者に返して席に座られ、さらにこのように語られました。

「この聖書の言葉は、今日、あなた方が耳にした時、実現した。」

会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていました。そして皆はその口から出る恵み深い言葉に驚きました(ルカ、4：16-22；cf. マルコ、6：1-2、マタイ、13：53-54)。それも不思議ないこと。主は神々しくも美しく、またこの上なく雄弁であられたのです。ダビデは、主について、この二つの点をこう述べています。

「あなたは人の子らのだれよりも美しく、あなたの唇は優雅に語る。」(詩篇、44：3)³³⁾

さらにまた、我らが主イエスは、わたしたちの救済のために弟子たちを呼び集め始め、ペトロとアンデレを三度呼ばれました³⁴⁾。一度目は、前にも述べましたように、ヨルダン川のほとりにおられた時で、その時二人は幾分イエスを知ったのですが、主について行きませんでした。二度目に主は、船から彼らと呼ばれました。その時、ルカが述べているように(ルカ、5：1-11)³⁵⁾、二人は漁をしようとしていました。この時彼らは主の教えを聞き、主に従いましたが、また自分たちの本業に戻るつもりでいたのです。三度目は、マタイが伝えているとおり³⁶⁾、主は彼らに、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と、おっしゃいました(マタイ、4：19；マルコ、1：17)。そこで二人は網と船と父を捨てて、主に従ったのです。後の二回の場合は、ペトロとアンデレと同じ場所にいたヤコブとヨハネも呼ばれました。また、ヒエロニムスが言っているように、主は福音書記者ヨハネを婚礼の席から呼ばれましたが、これについては福音書にははっきりと書かれていません。主はまた、フィリポを呼ばれ(ヨハネ、1：43)、また別の場所では、徴税人のマタイを呼ばれました(マ

33) 傍注：Speciosius forma pre filiis hominum etc. (詩篇の引用)

34) 傍注：De qua vocatione habetur Johannis primo capitulo (弟子たちの召喚の方法について：ヨハネ、第1章)

35) 傍注：Luce quinto capitulo (ルカ、第5章)

36) 傍注：Matthaei quarto et Marci primo (マタイ、第4章 及び マルコ、第1章)

タイ、9：9)。しかし他の弟子にどのように呼びかけられたかはっきりと書かれておらず、[N]ただ、ルカが12人の選ばれた弟子たちを記して、全員の名前を挙げています³⁷⁾。[n](ルカ、6：13-16；マタイ、10：1-4；マルコ、3：13-19)

さてここで、心を集中してこの弟子たちを呼び集められた時のこと、主と弟子たちの会話、主がいかに弟子たちに優しく話しかけられたか、いかに打ち解けた態度で接されたか想像してください。内的には恵みによって、外的には行いによって、彼らを主の愛に引き寄せ、親しく彼らを母の家に招き、またしばしば一緒に彼らの家に行き、彼らに教えを説き、伝え、そうして手を尽くして彼らに世話をやき、母が子にするように心を砕かれました³⁸⁾。書かれたところによると、主はどこで彼らと眠られても、皆が眠っている夜中に起きて、誰か掛け物をはねている者がいれば、そっとやさしくまた掛けなおしてやられたと聖ペトロは言っています。主は、彼らをどのような人にするおつもりか承知しておられましたから、彼らを本当に大切に愛されたのです。彼らは粗野で荒々しい暮らしをしていましたし、平凡な血筋の者でしたが、それにもかかわらず、この世の王者、全キリスト教者の霊的戦いの将軍、非キリスト者に審判を下す者になさろうと考えておられたのです。

さてここで、どのような人々が信仰を始め、聖教会の礎を築いたのか考えてみましょう。[N] 彼らのような平凡な漁師、貧しい、無学の者たちです。[n] われらが主は、後に彼らによって達成されるべき偉業が彼らのもともとの偉大さからなされたことだと思われぬように、偉大な学者や賢者、この世の権力者などをお選びにはならなかったのです。しかし主はこの計画を当然密かにご自分の胸におさめ、主ご自身の善と力と知恵によってのみ、わたしたちを買い戻し、お救い下さったということをお示しになりました。

第十七章 婚礼での奇跡：水をぶどう酒に変えられる（ヨハネ、2：1-11）

[N] 我らが主イエスが洗礼を受けられてからちょうど十二ヶ月目のその日だということで、ガリラヤのカナと呼ばれる場所で婚礼がありました。[n] この婚礼については、誰の婚礼であったのか疑義が残っています³⁹⁾。しかしここでは一般的な意見に従って、また聖ヒエロニムスがヨハネによる福音書の前書きでも言っているように、福音書記者ヨハネの婚礼であったと仮定しましょう⁴⁰⁾。

この婚礼には、我らが主イエスの母が、三姉妹の長姉、最も尊い人として臨席していまし

37) 傍注：Luce sexto (ルカ、第6章)

38) 傍注：Nota benignam curam Jesu. (イエスの恵み深い気遣いについて)

39) 『黙想』では出典を *Hisotoria scholastica* であるとしている。

40) 傍注：Nota nupcias Johannis euangeliste (福音書記者ヨハネの婚礼に注意)

た。ですから他の客のように請われ招かれたのではなく、妹の家なので自分の家のように慣れた様子で、その家の主人のように差配し、取り仕切っておられました⁴¹⁾。これについては福音書のその話に三つの証拠があります。

まず第一に、福音書に「イエスの母がそこにいた」、続いて「イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた」とあります⁴²⁾ (ヨハネ, 2:1-2)。ですからその時聖母さまの妹マリア、つまりゼベダイの妻サロメが、息子ヨハネを結婚させるため、まずカナから約4マイルのナザレの聖母さまのところに行き、息子ヨハネの婚礼を行いたいと言ったのだと想像できます⁴³⁾。そこで聖母さまは、準備のために幾日前前からサロメと一緒に行かれたので、他の客が呼ばれた時に、既にそこにいて馴染んでいらしたのです。

第二の証拠は、ぶどう酒が足りないことを聖母さまがご存じであったという点です⁴⁴⁾。ですから聖母さまは他の招待客のように宴席についていたのではなく、食事や飲み物やその他必要な物を運ぶ人たちに混じって忙しくしていたわけで、それで事前にぶどう酒が足りないことを見て取り、そっと息子に告げて助けを求めたのです。他の女性たちと一緒に座っていたのなら、席を立たずに——席を立つのは無作法なことですし——そんなことはできなかったでしょう。また、聖母さまのように謙遜の徳高い方が、男性に混じって息子の隣に座っていたとは信じがたいことです。ですから、聖母さまは客として座っていたのではなく、上に述べたように主催者側にいたことになります。

第三の証拠は、聖母さまが召使に、息子のところに行き、息子が言いつけることをそのとおりにしなさいと言ったことです⁴⁵⁾ (ヨハネ, 2:5)。このことから、聖母さまが彼らを監督する立場にあって、婚礼を切りもりし、足りないものがないように気を配っておられたと思われるのです。

ですからこの婚礼の様子と、そこで行われた奇跡の話について黙想することによって次の

41) 傍注：Hic (注意)

42) 傍注：prima evidencia (第一の証拠)

43) 福音書記者ヨハネがマリアの妹の子供であることは、本書十一章に述べられているが、もちろん定説ではない。このヨハネは漁師ゼベダイの子として福音書に出てくるので、マリアの妹はゼベダイの妻ということになる。サロメ (あるいはマリア・サロメ) という名は、イエスの磔刑を見届けた女の一人として「小ヤコブとヨセの母マリア」とならんで出てくるので (マルコ, 15:40)、そこからの連想であろうか。伝説的にマリアはヨアヒムとアンナが年をとって生まれた子ということになっているから、妹が二人いるというのも考えにくい。カナの婚礼が、福音書記者ヨハネの婚礼であったことも、ラヴが十六章で述べているように、福音書には書かれていない。

44) 傍注：secunda evidencia (第二の証拠)

45) 傍注：tertia evidencia (第三の証拠)

ように理解することができます。第一に、我らが主イエスが一人の一般人として人々の間で食事をしてられるお姿、それも上座の偉い、身分の高い客の席ではなく、最も末席に座っていらっしやるところを目に浮かべるべきです⁴⁶⁾。なぜなら主は後に福音書で「婚宴や宴席に招待されたなら、末席にいて座りなさい、云々」と教えておられるからです（ルカ、14：10）。主は後に言葉で教えを説かれることを、まず行いでお示しになるのが常でしたから、[N] この時も高ぶる者のように一番の上席にお着きになったはずはなく、むしろ質素な人々と下座に着かれたことでしょう。[n]

またここで、母、聖母さまのお姿を想像してください。万事がうまく、ふさわしく運ぶように、召使たちに給仕の仕方などについて指図しておられます。そして後に、宴席も終わりに近づいた時、召使がやってくるまでぶどう酒がなくなったと告げたのです。マリアさまは少し考えてから、わたしが何とかしましょうとお答えになりました。そしてその部屋を出て会場に行き、戸口に近い、宴席の端に座っておられた息子イエスのもとへ行き、耳元でこうささやかれたのです。

「息子よ、ぶどう酒がなくなりました（ヨハネ、2：3）。このわたしの妹は貧しいのです。ですから、どこからぶどう酒を調達してくればよいのかわかりません。」
するとイエスは答えて、言われました。

「わたしと、そしてあなたとどんなかわりがあるのです。」（ヨハネ、2：4）

これは母に向かって言うには、つれなく、乱暴な返事に思われます。しかしこれには、聖ベルナルドゥスが言っているように隠された意味があり、わたしたちへの教えとして言われたのです。[N] このことについては、この話の後で語りましょう。[n] この一見つれなく、よそよそしい返事に、母は動揺することも悲しむこともなく、息子の大きい善と深い慈悲に全面的信頼をよせ、召使たちのところに戻り、こう言ったのです。

「わたしの息子イエスのところに行き、この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください。」（ヨハネ、2：5）

そうして我らが主の言いつけで、召使たちが、水がいっぱいに入った水がめに、さらに縁まで水を満たすと、なんと主のお言葉で全ての水がめの水がぶどう酒に変わったのです。そこで主は、そこから汲んで、アルキトリクリネ、[N] つまりその家の客で最も身分の高い者 [n]⁴⁷⁾

46) 傍注：Nota humilitatem domini Jesu（主イエスの謙遜に注意せよ）

47) ウルガタ聖書の“architricline”は「宴会の世話役」と解釈されるが、古くは、ここでのように、しばしば誤訳を招いた。Walter Hiltonなどが固有名詞と勘違いしている。John Ayto and Alexandra Barratt, eds. *Aerlred of Rievaulx's De Institutione Inclusarum: Two English Versions*, EETS OS 287 (1984), p.19 参照（In Sargeant, p.272, n.82.25-26）。ここでは、ラウの論旨が乱れるので、「宴会の世話役」ではなく、原語の表記をカタカナにして用いた。

のところへ持っていくように言いました（ヨハネ、2：6-8）。

この言いつけの中で、最初に最も身分の高い人のもとへぶどう酒を運ばせた点に、まず我々が主の思慮深さをみることが出来ます。また、「アルキトリクリネのところに行ってきなさい」と言われた、このことから、主がその客から離れたところに座っておられたことがわかります。それはその客が最も上座に座っていたからです。前にも申しましたように、主は最も低い席に座っていらしたと見受けられます。そしてその客はぶどう酒の味見をし、誉め、他の客ともどもそれを飲みました。そのぶどう酒がどのようにして作られたかを知っていた召使たちはこの奇跡を皆に告げ、そして弟子たちは、[N] この最初の奇跡が目で行われたのを見たので、より一層堅く [n] 主を信じるようになりました。[N] そのようにしてイエスは、その栄光と神性を現されたのです。[n]（ヨハネ、2：9-11）

その後、婚礼がすべて終わった後、我々が主イエスはヨハネを一人呼び寄せて言われました。

「あなたが妻に娶った女と別れ、わたしに従いなさい。わたしはあなたに、より良い、より完璧な婚姻をもたらすだろう。」

そこでヨハネは妻を捨てて、イエスに従いました。

以上の話から、わたしたちの教えになる多くのことがわかります。まず、我々が主イエスは、その婚礼の席に来て列席されたということで、婚姻と肉なる結婚が法に適い、神によって定められたことであることを示しておられます。一方ヨハネを呼ばれたことで、霊的結婚がはるかに完璧で尊いということをわたしたちに説いておられるのです。

また主は母に、「わたしと、そしてあなたとどんなかわりがあるのです」と言われましたが、その一見つれなくよそよそしい答えは、聖ベルナルドゥスが言うように⁴⁸⁾、修道の道に入り世間を捨てたわたしたちに対する教えです。わたしたちは、肉なる親のことを過度に気に掛けたり、心配しすぎたりするあまり、親の要求でわたしたちの霊的修練を遅らせてはならないのです。わたしたちがこの世に関っている間は、生みの親に恩があります。しかしこの世を去り、おのれを捨てた後では、生みの親にかかわる事から解き放たれ、自由になりなさい。

ある書物に書いてあることですが⁴⁹⁾、ある時、ひとりの隠者、あるいは修道僧がこの世を捨てて、独り荒れ野に住んでいたところ、実の兄弟がやってきて、この世の事にかかわるあ

48) 傍注：nota pro religiosis bernardus in sermone de epiphania sexto（修道者のための注意、ベルナルドゥス、顕現日の説教、6）；Bernard, “Dominica Prima Post Octava Epiphaniae Sermo II,” 5 (PL 183:160).

49) 傍注：Narratio（例話）

る用事で助けを求めました。すると隠者は、ずっと前に死んだもう一人の兄弟のところへ行くようにと言ったのです。兄弟がその答えに当惑し、その兄弟はとっくの昔に死んだじゃないかと言いますと、僧は、「わたしもこの世では死んでいるのです」と答えたということです。同様に、我らが主イエスは、主の母、それもそれほどの母に、「わたしと、そしてあなたとどんなにかわりがあるのです」と言って答えることによって、この世を捨てたわたしたちは、肉の親やこの世の友について修道会が教える以上に執着してはならないと教えたのです。これらの言葉には別の解釈がありますが、それは学者たちが広く伝えていますので、ここではとぼします。

[N] さらにここで、前に述べたように、そのよそよそしい答えにあきらめてしまうことのなかった聖母さまの行動に、忍耐と希望の教えを学ぶことができます⁵⁰⁾。ですからわたしたちが、肉のあるいは霊的な必要から助けを求めてイエスに呼びかける時⁵¹⁾、すぐに助けが得られぬばかりでなくむしろ困難や逆境にあおうとも、あきらめることなく希望を持って、味のない水と冷たい逆境と苦行が、主の慈悲と恵みによって、癒しのぶどう酒と霊の喜びに変わるまで、主に呼びかけるべきです⁵²⁾。[n]

この奇跡が行われた後、我らが主イエスは人類の救済のために、広く働き、伝道を進めようと思われ、その場所から母と弟子とともにナザレのそばのカファルナウムに行かれ、数日後にまた、母を導きナザレの家に帰られましたが、道々弟子たちは、イエスに続きながら、イエスの言葉、イエスの教えに熱心に耳を傾けました。というのも主は休むことなく、常に善を行い、働き、宣教のために教え、語られたからです。わたしたちも主の御名にかけてそういたしましょう。とこしえに恵みあれ。アーメン。

第十八章 我らが主イエスによるあのすばらしい山上の説教について (マタイ、5-7章)

我らが主イエスは、前に述べたように弟子たちを選び集められた後、新しい律法の完璧さについて彼らに教え伝えようと、ナザレから約2マイルのところにあると言われているタボルと呼ばれるある山に彼らを導き、そこで長く、実り多い説教をされました。[N] それは、アウグスティヌスがこの説教について書いた書物の初めで述べているように⁵³⁾、キリスト教徒の生活の完成に関する全てのことを含んでいます。というのもその説教の中でイエスは、

50) 傍注：de paciencia et spe (忍耐と希望について)

51) 傍注：nota bene(よく注意せよ)

52) 傍注：nota (注意)

53) 傍注：Augustinus de sermonibus domini in monte (アウグスティヌス、山上の説教について)
(PL 34:1229-30)

弟子たちに、まずどのような人が神の恵みを受けるのか、神の恵みに値するのかについて教えているからです。[n] またイエスは、祈り、断食、施し、またその他完璧な生活に必要な美德の真のあり方について教えました。これについては福音書がはっきりと語っていますし、様々な博士や学者が十分に解説していますので、この話はここでは割愛します。ラテン語でも英語でも、他の多くの書物に書かれているからです。また、その全ての点について、ここで黙想の方法で語るなら、大変長い話になってしまいます。ですからここでは、特に次のことを胸に留めておきましょう。我らが主は、この説教を、清貧の徳から始められ⁵⁴⁾、清貧こそ全ての霊的实践の第一の礎であることを伝えようとなさいました。ひと時の事物、現世の富を過剰に背負い持つ者は、清貧の鏡、範であるキリストに、自由に、すみやかに従うことができないからです。[N] つまり、この世の事物を好み、これに執着する者は、[n] その奴隷であり、隷属しており、自由ではないからです。人は、心のうちで愛するものに愛情によって自ら奴隷となり隷属するからです。ですから貧しい者、つまり心のうちで神のみを愛する者、あるいは神のためにのみ愛する者、それゆえに神のためにその他全ての現世のものを軽蔑する者は、祝福を受けるのです。ですから聖ベルナルドゥスはある説教で、清貧は偉大な翼の偉大な羽根である、これによって人は速やかに天の御国へと舞い上がると言っています⁵⁵⁾。というのも福音書のこの箇所です。後に続く他の美德については、その報酬は後に与えられると約束されていますが、清貧の徳の報酬は未来に約束されているだけではなく、今この時にもキリストによって与えられると説教の初めに約束されているからです。それはこうです。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」(マタイ、5:3)

[N] いいですか、主は「であろう」ではなく現在のこととして、「である」と言っておられます。また、ただ貧しいのではなく、「心の貧しい」人々が祝福されるのです。そこにこそ清貧の徳があるのであり、心の貧しい人とは、原罪によって誰もが持っている驕りを心に少ししか持たない人のことで、現世の物を少ししか持たない人を現世的に貧しいというのと同様です。[n]

ともあれこの件はさておいて、観想に心に向け、我らが主イエスが、謙卑に、従順に、その山に腰をおろし、また弟子たちがそのまわりに座り、主が愛情深い真剣な表情で教えに満ちたそれらの言葉を語り、至上の完成についての尊い教えを説かれた様子を想像しましょう。

54) 傍注：Nota de paupertate (清貧に注意)

55) 傍注：bernardus in semone quarto de aduento (ベルナルドゥス、降臨についての説教 4)；
“De Adventu Domini Sermo IV,” 5 (PL 183 : 49).

また、弟子たちが従順に、一心に主の尊い顔を見つめ、甘美なお言葉に耳を傾け、それを懸命に心に刻む様を、そしてそのようにして彼らが主のお言葉を聞き、主のお姿を拝し、大いなる喜びを得、霊が満たされることを想像しましょう。

[N] 思うに弟子たちは、その時の教えの中でも特に、あの尊い短い祈り、「主の祈り」に⁵⁶⁾、そしてその祈りに感じた大きな果実に、またその祈りによって得た大いなる信と希望に心を慰められたであろうと思います⁵⁷⁾。というのも、第一のこと、つまり祈りの果実については、彼らは文字通りこれを理解しただけではなく⁵⁸⁾、主の恩寵によってひとつひとつの祈りの言葉を霊的に理解したでしょうから。その祈りには、わたしたちの霊と肉に必要なすべてのこと、この世でのかりそめの命、そしてもうひとつの世界での永遠の命についてのわたしたちの願いが込められており、それもそのように短い言葉の中にすべて含まれているのです。ですから、彼らとその祈りの偉大な果実を味わい、その祈りに大いなる喜びと慰めを得たとしても不思議のないことです。そしてその祈りの霊的な果実とその甘美な味を神の恵みによって知る者はすべてを得るのです。

その祈りの第二の慰め、信と希望については⁵⁹⁾、彼らが願うべきこと、願うと良いことをただ一人知っておられる方、ただ一人それを彼らに与えることができる方が、彼らが願いをする際に間違いのないように、また失敗なく願うことができるようにその祈りを彼らに教えてくださると知ることほど、彼らの信と希望を堅固に強固にすることがあったでしょうか。そうして審判者であられた方が、彼らの訴訟において、刑の宣告、判決を阻止することができる弁論趣意書を作られたのです。また、主人であられた方が、彼の召し使いに必要なであり、主人が与えたいと思うもののみを願うための請求書を作られたのです。困ったときの祈りと願いに関し、これ以上の慰めはありません。

さらに主は、同じ説教の中で、直前に、偽善者の祈り、そして聞いてもらうに値しないその他の祈りを戒めておられるので、この祈りの慰めはより高まるのです。薬の効き目は、欠陥や病が事前に明かされ告げられるなら、より快く好ましいのと同じです。

心を込めて祈り、死に至る罪に染まることなく唱えるならば、これら全ての慰めをこの「主の祈り」の中に見い出すでしょう。なぜなら、我らが主イエスは、この祈りをその時特別に彼とその山にいた弟子たちのためだけに作られたのではなく、わたしたちとなべてのキリスト教徒が、主の御名において、天の父に、世界の終わりまで祈りを捧げるべく作られたので

56) 傍注：Pater noster (主の祈り)；マタイ，6：9-13。(cf. ルカ，11：2-4)

57) 傍注：nota duo (二つの注意事項)

58) 傍注：primum (第一)

59) 傍注：Secundum (第二)

すから。

しかし他の個人的な祈りと一緒に個人的な敬心で唱えたり、心を込めずに祈り、この最も尊く最上の祈りを過信するなら大いに間違っており、害こそあれ益はありません。日々見かけることですが、多くの男女が数珠を手に持ち、指でたぐり、ぶつぶつと口を動かしているが、視線は虚栄に注がれ、心は——恐ろしくも神のみぞ知る——現世の事物に向けられている。このような人の振る舞いについて、我らが主は、預言者イザヤの口を借りておっしゃいました。

「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。」(マタイ、15：8；マルコ、7：6；イザヤ、29:13)⁶⁰⁾

しかしこの事柄については、多くの他の説法、書物にラテン語、英語で語られていますし、この祈りは十分に解説されていますので、ここでは簡単に済ませることにします。ただし、この祈りに関してひとつだけ申し上げたいことは⁶¹⁾、この祈りに心を込めて、心のうちでこの祈りについて霊的な教えを得たいと望み、皆と唱える時も独りで唱える時もこの祈りに全霊を注ぐことに専心するならば、だれでも神の恩寵により、時が来れば、その祈りに多くの慰めを得、いかなる必要、事情によって神の救い、助けを願い、特別な祈念に心動かされるとしても、人の作った他のどの祈りにもまして、これほど芳しく、これほど効力のある祈りはないと知るに至るだろうということです。そしてそのような人は、神が心から喜んで彼に恵みを賜る時、この祈りについての一般的な解説書に書かれているより、あるいは自分が語ることができるかもしれないより、はるかに多くの教えを魂のうちに見出すでしょう。

ところが、召使や牧人のような大衆は、神の子として天の我らが父なる神を愛し、神に喜んでもらうために祈るよりも、この世での特別な報酬を願って祈ろうとする思いが強いです。そうすると、神ご自身が作られた皆のためのこの祈りより、聖母さまや聖人たちに捧げる、人が作った個人的な祈りを好んで、せっせと唱えるようになります。しかし主の祈りこそ、間違いなく神にとって最も喜ばしく、わたしたちにとって最も力があるのですから、そうした人は多くの点で思い違いをしています。わたしがここで述べているのは、詩篇や教会礼拝のことではありません。

とはいえ、主の祈り以外の、神に、聖母さまに、聖人たちに捧げた他の敬虔な祈りも、それを唱えたいという気持ちがあふさわしい時に生まれ、この最も尊い祈り、「主の祈り」に対する愛情がその分減少するのでないかぎり、唱えて悪いということはありません。多くの民

60) 傍注：populus hic labiis me honorat (マタイ、マルコの引用)

61) 傍注：Nota de experientia oracionis Pater noster etc. (「主の祈り」その他の祈りの実践についての注意)

が、他の個人的な祈りを唱える時にはその祈りに全霊を注ぎ、大変熱心に唱えるのに、「主の祈り」を言う時はおざなりで、心を込めずに早口で済ませてしまいます。それも敵を負かしたいとか、火事や水害や突然死、その他肉なる危機にあわないようにといった、この世での、かりそめの、個人的なおかげを得るためにそうした個人的な祈りをいうことが多いのですが、正しい生き方をしないなら、どんな祈りを唱えても、かなえられると思うなら大変愚かなことです。しかもそのように特殊な、かりそめの報酬を望むべきではありません。ただ神の御心に任せるべきです。神のみがわたしたちにとって良いことをご存知で、間違いなく、他のどの祈りより「主の祈り」、特にあの懇願、願ひ *fiat voluntas tua sicut in cello et in terra*、つまり、「天にまします父なる神よ、御心が行われますように、天におけるように地の上にも」と、真に心を込めて言うならば、わたしたちに最も益があるはずなのです。そしてさきほどの願いを正しい生き方をしながら言う時、もしわたしたちにとって火事や水害や突然死やその他の肉なる危機から守られることが一番良いことならば、我らが天の神は、間違いなくそのようにしてくださいし、そうでなければ、そうはなさいません。個人的な祈りを捧げなくてもです。よく読んで知っているように、様々な殉教者や聖人が火刑、水刑その他いろいろな方法で、この世の基準で言うなら恥辱的な死に方をしていますが、それは彼らにとって最上のことであったので、天の至福の喜びを増したのです。ですから、おわかりのように、そのような肉なる危害、危機から守ってくださいとか、突然死を免れますようにとか祈るならば大変な愚行であることは明々白々です。多くの人にとって、人の目には恥辱的と映るそのような死に方は、益のあることなのです。聖グレゴリウスが預言者アブドの例をあげて言っています⁶²⁾。彼は獅子に殺されましたが、神はしばしば正しい人をそのような恥辱的な死によって清めてくださるのです。聖書が証言するように、「神に従う人は、どのような死に方をしても」(知恵の書、4：7)⁶³⁾、その魂は救われ、永遠の安らぎを得るのです。それにもかかわらず、わたしたちはしばしば、しかも熱心に突然死からお守りくださいと祈ります。しかし、それは死をもたらず罪を背負ったまま、心の悔恨、口での懺悔をせずに死んでしまうことがないようにするためだと理解してください。そのためには、「主の祈り」、中でも特に最後の二つの懇願、願ひが最も良く、効果がある祈りだと思うのです。この祈りによってわたしたちは全能の天の父に祈るのです。「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。アーメン」と⁶⁴⁾。

62) 典拠不明。獅子に殺された預言者については、列王記上、13：1-29に言及している。

63) 傍注：Justus [autem] si morte preoccupatus fuerit (知恵の書の引用)；共同訳：「神に従う人は、若死にしても安らかに憩う。」

64) 傍注：Et ne nos inducas in temptationem, sed libera etc. (マタイ、6：13引用)

この尊い祈りについて語るべき事柄は尽きませんし、またこの書の作者ももっと語りたいのですが、それは他の多くのところに十分に語りつくされていると思いますし、この後重要な話が続くことですので、ここでは、この話について、また我らが主イエスがその山で弟子たちにされた実り多い説教についてはこれくらいにし、敬虔な黙想により主と共に山を降りましょう。[n] そして、山上でその尊い教訓を説かれた後、その崇高な完成にふさわしく、我らが主イエスが従順な弟子たちを伴って下山されるご様子、またその道中親しく彼らと言葉を交わされ、弟子たちが、親鳥に続く雛のように、霊的な喜びに満ちて主に続き、我先に主の隣に並び、主の徳高い、甘美なお言葉を聴こうと躍起の様子を思い浮かべてください。

主は山を降りられると、多くの人々が主のもとへやってきて、様々なたくさんの方を連れてきたと聖書に書いてあります。それらの方々を、主は慈悲深くも癒され心身ともに健康にされました。

[N] ここでは聖書の多くの話と、前に述べたボナヴェントゥラの書物のうち多くの章を割愛します。前にも度々述べましたように、この書物を特に英語でしたための理由である純朴な霊に必要なと思われる教えが少ないと思われるからです。そういうわけで、この話も多くの箇所をかいつまみ、簡単に、ためになる重要な点のみを語りましょう。アーメン。[n]⁶⁵⁾

65) 紙面の都合上、「水曜日」第十九章—第二十四章は次号に掲載予定。